

「一から全て」、「一流のものを一流のお店に使う」ことをコンセプトに、畑74aとハウス1棟で主にハーブ類、リーフレタス、新潟在来種の野菜を、農薬・肥料・除草剤を使わず栽培し、加工、包装、販売までのすべての作業工程を農福連携で行う。農産物を加工することで長期保存を可能とし、付加価値をつけ収入アップを図るとともに、障害者の活躍の場を増やし、'やり甲斐'を育てていく。

基本情報

- 所在地：新潟県新潟市
- 団体名：CuRA！（ちゅら）
農園CuRA!
- 取組パターン：連携型
- 主力商品・イベント：
ハーブ、ハーブ加工品、レモン、ジャム、
ドレッシング、在来種野菜、味噌加工品

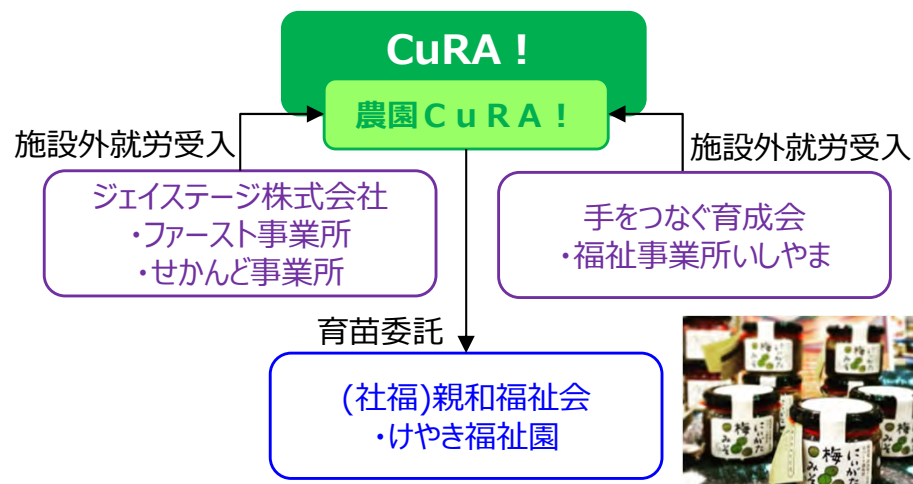


取組の概要

- 農園CuRA!は、当園スタッフと健常者1名、パート雇用2名、施設外就労受入を2箇所の事業所から行い、育苗作業を1事業所に委託し、経営している。
- 除草や耕耘等の圃場整備から播種、間引き、剪定、収穫、出荷準備、検品、販売等のすべての作業工程に障害者が関わり、責任とやり甲斐を感じることで、生産量・品質向上に繋がっている。
- 新潟市内の特別支援学校の生徒の受入を2018年から毎年実施し、施設外就労の利用者とチームを組み、切磋琢磨しながら協働作業を行っている。
- 周辺農家が生産している果物や野菜と、ハーブを組み合わせ、ドレッシングやジャム等の加工品を製造し、県外でも販売している。
- 2019年には、輸出を視野に入れ、ロシア・フランス・シンガポールへサンプル輸出を実施。
- 2020年から複数の福祉事業所とともに、赤しその栽培から加工を施設の設備や技術に合わせ作業分担し、商品製造をし、一般販売が決定した。

項目	単位	取組当初	H28年	H29年	H30年	R元年	R2年
障害者数	人	3		3	6	10	17
農地面積	a	54		54	61	61	72
障害者月平均賃金	千円			12,000	24,000	139,440	338,640

体制図



取組の成果

- 障害者の得意を伸ばすことで新たにできる作業が増え、生産性が3倍以上アップし、販路拡大と売上向上に繋がった。
(2019年：430万円→2020年：834万円)
- 障害者就労者数も、取組当初より増加している。
(2017年：3名→2020年：17名)
- OEM、PB商品の受託が可能となった。



所在地 ▶ 新潟県新潟市江南区嘉瀬3336-4
 連絡先 ▶ TEL:090-8724-6050 FAX：－
 E-mail:niigata_herb_cura@icloud.com
 ウェブサイト ▶ <https://www.facebook.com/niigata.herb.cura>



【取組のプロセス】

幼少期

荒廃農地の増加と
地域住民の高齢化
という現状

2017年～

大量のハーブが
欲しいという問
い合わせが度々
あった

2018年～

新潟市アグリサ
ポートセンター
と江南区役所の
マッチングを利用。

2019年～

稲作と果樹栽培は
盛んだが、色味が
ある花などが地域
にはない・・・

2020年～

新潟市12次産
業化推進計画

今後の
展望

きっかけ

両親が経営する学習塾に通う生徒の7割～8割が障害児であったため、周囲に障害者がいることは当たり前であった。次第に、彼等の働く環境に疑問を抱き、「活躍の場をつくりたい!」という思いにつながった。

新規就農・農福連携スタート

- 販路が確立している作物中心の農業であれば工賃が払えると考え、就農当初から施設外就労を受け入れた。
- 精神疾患のある人が香りで癒やされながら‘やり甲斐’を感じられる機会を設けたいと考え、54aのハーブ園を開始した。（施設外就労受入と援農ボランティアの受入）



加工製造をスタート

- 県外にもファンを増やしていくことを目標に、フレッシュな商品よりも高単価で日持ちする加工品を一次生産と並行して製造することにした。
- 作業が少ない梅雨時期や冬場に加工品を製造することで急な天候の変化などで作業がなくなるリスクを減らした。本人が使いやすい作業ツール・工程の工夫も常に行っている。



輸出を視野に入れ、海外の商談会に参加 ロシア、フランス、シンガポール、ベトナムへサンプル輸出を開始

- 新潟県内や日本国内だけでは販路が増えたとしても頭打ちになる。世界に出荷していくことができれば、今関わっている福祉事業所だけではなく、ほかの施設なども仕事が少ない時に製造して作りだめていくことで、常に仕事する環境が用意できると考えた。



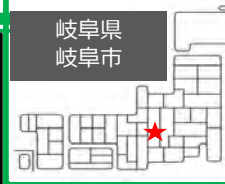
エディブルフラワーの生産を開始

- 高齢であっても、言葉など表現が不自由でも、「きれい」「いい香り」など感動を共有できる景色を作り出し、それを地域の高齢者やUターン組とのコミュニケーションツールの一つとして利用していきながら共生を目指している。

・グローバル展開・香りと彩りで明るい世界をつくる

- 輸出を本格化し、農福連携で作った商品が海を渡ることができるようにする。
- ハーブや花を生産する圃場面積を1haに拡大。五感で感じながら働くことができ、近隣住民ともコミュニケーションが図りやすい、居心地のよい職場・居住環境を作っていく。





2020年、JAぎふが全国の単位農協では初の特例子会社を設立。地域共生社会の実現に貢献するという理念で活動し、自作農地約5反でサツマイモ、トウガラシ、サトイモ、景観作物の栽培をはじめ、現在は手作り味噌の製造販売等で安定した収入と、社会貢献活動として障がい者向けの体験農園を開園した。

基本情報

- 所在地：岐阜県岐阜市
- 団体名：株式会社 JAぎふ はっぴいまるけ
- 取組パターン：グループ連携支援型
- イベント：はっぴいマルシェ



当社加工品をマルシェで提供
現在毎週金曜日に開催



社員デザインの新ラシ

取組の概要

- 障がい者の1年を通じた農業経営の取組として、LED人工光栽培による枝豆、ブロッコリー、花苗の販売や岐阜農林高校との連携で、美濃飛騨伝統野菜（まぐわうり）の原種苗を譲り受け、委託栽培。
- 出向く農業の実施として、米農家へ田植え、稲刈りの労働力支援、野菜農家へ正月用祝大根出荷作業の労働力支援。
- 農産物加工事業は枝豆の剥き身・冷凍イチゴ加工・各務原にんじん袋詰。
- 6次産業の開発に JAぎふ女性部より事業継承した（まめなかな味噌）の製造販売。



LED人工光栽培



農林高校生と（まぐわうり）の定植



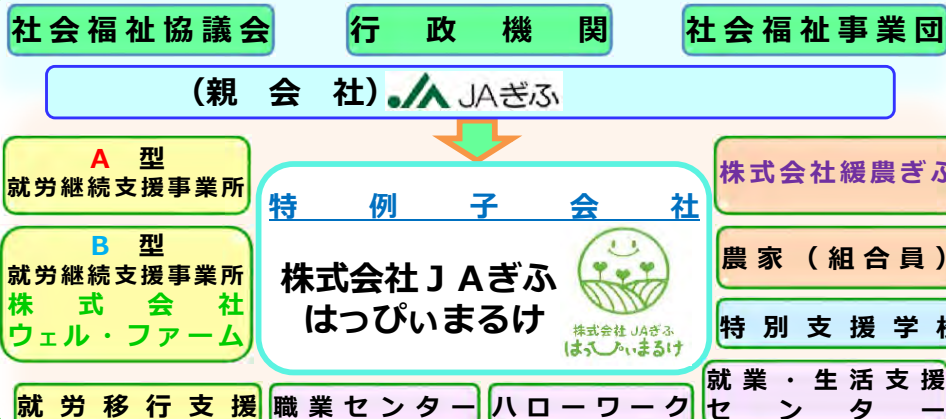
味噌加工作業



各務原にんじん袋詰め

体制図

障がい者雇用ネットワーク



取組の成果

- JAぎふ女性部より事業継承した「まめなかな味噌」はJA直売所で完売状態で、それをもとに幻の唐辛子を混ぜ合わせた加工品「徳山とうがらし味噌」がヒット商品となり、味噌事業の売上は500万円。
- 岐阜農林高校から提供された美濃飛騨伝統野菜（まぐわうり）の原種苗を当社が栽培管理し高校へ出荷⇒岐阜農林高校が加工⇒まぐわうりアイス売上50万円。
- はっぴいマルシェの開催
当社で生産した農産物、加工品の販売、加工品を使用した飲食提供で地域交流。
- 2020年度の平均賃金について、年度当初の月額10万円から年度末には月額11万5千円へ増額となった。

所在地 ▶ 岐阜県岐阜市司町37

連絡先 ▶ TEL:058-265-3521 FAX : 058-265-3672

E-mail: happymaruke@gmail.com

ウェブサイト ▶ <https://www.facebook.com/happymaruke/>

【取組のプロセス】

2020年～

出向く農業も実施

・米農家への支援
田植え、稲刈り時期
の労働力支援

・野菜農家への支援
正月用祝大根農家へ
出荷作業時の労働力
支援

広報活動 SNS
Facebook・Instagram
LINE@の開設

機関紙
JAぎふ職員向けの
まるけ通信の発刊

啓発事業
【まるけボランティア】

JAぎふ職員に呼びかけ一
緒に活動を行いたい人の
組織

現在12名登録

2021年～

今後の
展望

きっかけ

2020年、単位農協で全国初の特例子会社となる。親会社JAぎふの経営理念を基に、地域の障がい者をはじめとするすべての人たちと向き合い、地域に根差した事業を行い居場所づくりと核となる存在を目指す。

年間を通じて安定した作業計画

- LED人工光栽培苗による枝豆、ブロッコリー、にんじんのプランター栽培を実施。障がいを持った本店事務職や清掃社員らによる農業の取組で、週1回全員参加で播種。
- 岐阜農林高校との連携により、美濃飛騨伝統野菜である岐阜県本巣市原産の希少種【まくわり】の原種苗を高校から譲り受け当社で委託栽培し、農林高校でアイスクリームなどに加工。



岐阜農林高校と連携まくわり定植

年間を通じて安定した収入源

- 農産物加工事業は枝豆の剥き身・冷凍イチゴ加工。
- JAぎふから出荷された各務原にんじんは、農福連携商品として当社シールを貼り、袋詰め作業を行い、会社概要が分かるPOP展示の結果、市況の1.5倍という高付加価値となった。
- 6次産業の開発にJAぎふ女性部より事業継承した【まめなかな味噌】の製造販売は安定した収入源。またローゼルを栽培し新商品として開発したハイビスカスティーを販売。



米農家・野菜農家へ労働力支援

地域共生社会の実現に向けた取り組み

- 体験農園の開設
障害者向け体験農園【まるけふあ〜む】を4回開園し、障がい者とその家族5組12名が参加。
- 【はっぴいマルシェ】を開催し、当社で作った農産物、加工品の販売、当社加工品を使用した飲食提供。
- 特別支援学校から実習生の受け入れ、視察、講演。
- JAぎふや行政と連携を図り、地域で農を通じた「障がい者雇用ネットワーク」を構築し、その中核となるような活動を推進。
- 空き家の草刈り・庭木伐採・管理等についてJAぎふ窓口に依頼があり、通年事業化に向けて取組の検討開始。



おんさい広場（JAぎふ）での勤務



空き家の草刈り

主力商品の事業展開・新規事業の拡充と有機JAS認定に向けて

- 岐阜県、JAぎふとの連携で、サツマイモの有機JAS認定に向けた取り組みの検討開始。
- ヒット商品を手掛け安定収入となっている味噌事業は、加工品の開発でさらなる付加価値を目指す。



障がい者向け体験農園



平成29年、農福連携で最高品質の苺をつくることを目指し、遊士屋（株）を設立。ウェルビーイング（肉体的、精神的、そして社会的にも、すべてが満たされた状態）な「生き直し」を支援する福祉施設と連携し、雇用創出・農業カリキュラムの場として確立させるとともに、著名ブランドなどで採用される苺を生産している。

基本情報

- 所在地：三重県伊賀市（伊賀農園）
- 団体名：遊士屋株式会社
- 取組パターン：連携型
- 主力商品：苺

完熟クラフト苺 B E R R Y
(自社ブランド)



取組の概要

- 連携するワンネス財団が運営するグループホームなどの施設を卒業した者（知的障害、発達障害、各種依存症、引きこもりなどによる生きづらさから回復した者）を一般就労の形で雇用。
- ワンネス財団は福祉カリキュラムとして当農園での作業を採用。週平均20名ほどの方々が当農園での作業を通し、他者と関わり合いながら自身の抱える障害や生き直しとして向き合っている。
- 直販と輸出に注力した品質特化の栽培戦略を採用。自社ブランドとして「完熟クラフト苺BERRY」を立ち上げる。農園から個人宅への直送を行う他、著名ブランド・国内外のトップシェフらから採用。



集中して苺の栽培を行う



ハケを使用して丁寧に選果



多様な年齢・背景を持つメンバーが働く

体制図



取組の成果

- お客様の声が直接届くことや、ミシュラン掲載店などで採用されることが本人（障がい者等）たちの生き甲斐に繋がっている。
- 独自流通を前提とするため、リードタイムが短く、完熟の苺の出荷など独自性を出すことで収益の安定と雇用増、生産や再投資につながる。
- 2020～2021年は、自社サイト経由だけで1,800件を超えるお客様へ苺をお届けすることができた。また、デジタル販売の活用が注目されGoogle社のテレビ広告に採用された。

所在地 ▶ 三重県伊賀市法花3605

連絡先 ▶ TEL：080-1618-5059

E-Mail：info@berryjapan.com

ウェブサイト ▶ <https://berryjapan.com>

【取組のプロセス】

強みを活かせるよう作業分野を分担。それぞれに責任範囲を持つような作業設計を行う。

福利厚生として、スタッフの心身の健康のため手作りの食事を振る舞ったところ、チームの結束も高まった。

個人向け直販、プロ向け直販、輸出等、売上を分散したことで、コロナ禍でも経営資源を最適に分配する体制が構築できた。

家族を畑に招いたり、母の日に会社経費で各自の母親へ苺を贈るなど家族とのコミュニケーションを大切にしている。

作付け面積5,500㎡、育苗施設などで15,000㎡を活用。これら全て地域の荒廃農地、遊休農地を有効利用。

2017年～

きっかけ

様々な生きづらさによって、一度は人生やキャリアに立ち止まってしまった方が、再び生きがいを持って「生き直すことのできる場」を作りたいという思いから、肉体的、精神的、そして社会的にも、すべてが満たされた状態を目指す農園として遊士屋を設立。

再び生きがいを持って「生き直すことのできる場を作りたい」

- 2017年10月、農福連携の実現を目指し三重県伊賀市の荒廃農地を賃借し、いちごのテスト栽培を開始。
- 農業と福祉を掛け合わせるだけでなく、「世界一だと誇れる仕事をする事」を掲げ、世界中に自分たちの作った苺を届けることを事業の根幹に据えて環境整備、仕組みづくりを行う。



BERRYの苺が
人気パティスリーに採用！

2019年～

自社ブランド「完熟クラフト苺BERRY」を発表

- 2019年12月、高級高品質の自社ブランドとして、「BERRY」を立ち上げ、個人向けのデジタル販売を開始。
- 国内直接販売とタイ・バンコク・シンガポール・台湾・香港などへ贈答品として輸出を開始。
- 英国王室御用達の陶磁器ブランド創設記念キャンペーンやミシュランレストランで採用となる。



BERRY使用のケーキ

2020年～

地域とともにある農園

- 地元在住のスタッフを雇用することで障がい者等への理解を広げ、高齢化集落で土地を借り、若い人材を増やしている。
- 地域と障がい者のコミュニケーションを増やすため、2020年後半から地域イベントへ積極的に出店。
- 地域住民との対話など様々なゲストを招き、交流することで社会性や自己肯定感が育まれている。
- 育苗施設、作付け等を行う農地は地域の荒廃農地や遊休農地を活用。



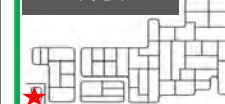
地球の未来に繋がる技術革新に取り組む

- 農福連携の枠組みにとらわれず、気候変動後の時代を見据え、環境負荷を限りなく減らした持続可能な栽培方法の確立という目標を定めて、当社農園敷地内に研究所を建設し、CULTIVERA社と共同で実証研究を開始。
- より大きなビジョンと課せられた使命が、本人（障がい者等）たちのモチベーションアップへ繋がる。



一人ひとりが主役として働く

今後の
展望



子ども食堂との連携や農場での不登校児の受け入れを経て、車椅子での作業に特化した農場を設立。
各所との幅広い連携により、多様な人材の就労の場、交流の場の確保を目指す。

基本情報

- 所在地：沖縄県沖縄市
- 団体名：うりずんファーム
- 取組パターン：連携型
- 選定表彰：
 - ・ 2013～2020年 中部ファーマーズマーケット生産量No.1 (JAおきなわ)
 - ・ H30 JAおきなわ青壮年大会（青年の主張発表の部）最優秀賞
同九州大会 日本農業新聞賞
 - ・ 2021年 毎日農業記録賞 優秀賞
- 主力商品・イベント：
 - 葉物野菜、低カリウム野菜等

取組の概要

- 車椅子に特化した農場を作り上げるため、2021年ウィルチャーファームを設立。
- ハウス内での車椅子目線の導線は健常者では見つけにくいいため、「障害者就業・生活支援センター花灯」の協力のもと、身体障害者の職場体験を実施。健常者が隣に居なくても作業できるシステムづくりを心掛けている。
- 沖縄の大きな課題である子どもの貧困の解決に寄与すべくファーマーズマーケットと共に子ども食堂への野菜の提供に取り組み、子ども達に農産物の生産から出荷までの課程を教える取組を継続して実施。
- 「こどもの居場所 美ら団子」へは野菜の販売委託も行っており、腎臓を患った方向けの低カリウム野菜の販路開拓にも繋がった。
- ウィルチャーファーム設立と併行し、就労継続支援サービスを行う「NPO法人大夢」と連携開始。農場拡大で増加した作業を委託。
- 高等特別支援学校の職場体験を受け入れ、2週間の実習期間中に野菜の原価計算ができるまでに指導。実習生の自信に繋げている。
- 農場で不登校児を受け入れ、社会との接点を作る手助けを実施。



車椅子(=ウィルチャー)の作業に配慮した農場

体制図



取組の成果

- 障害や生きづらさを抱える方の出来ることを増やして作業を担ってもらうことで、経営者として新たなチャレンジや経営規模の拡大が可能となった。
- 各所との連携が野菜のPRに繋がっている。
- 営農開始(2012年) ⇒ 2020年 の取組実績の推移

就労障害者数	0人	⇒	8人
売上高	6,000千円	⇒	22,000千円



子ども食堂との農産物販売の様子

所在地 ▶ 沖縄県沖縄市池原3232-2

連絡先 ▶ E-mail: urizun1852@gmail.com

【取組のプロセス】

2012年～

東日本大震災を契機に沖縄へ戻り営農を開始

2018年～

沖縄県で大きな社会問題となっている子どもの貧困へのアプローチ

2019年～

車椅子の義父が農場を訪れたこともきっかけとなり車椅子に特化した農場づくりを決意

2021年～

農場拡大に伴い作業が増加。福祉施設との連携を開始

障害者就業・支援センターからの紹介により障害者雇用している精肉店と連携し商品開発

今後の展望

きっかけ

パラリンピック選手の筋力低下の話を聞き、高付加価値野菜を身体障害のある方と共に作りたいと考え、車椅子に特化した農場を開設。

高等特別支援学校の職場体験、不登校児の受け入れの取組を開始

- 高等特別支援学校の2週間の職場体験の受け入れを、2018年から年2回継続して実施。2週間の実習期間中に、野菜の原価計算ができるまで指導。生徒の自信に繋がっている。
- 2019年頃からは、知り合いの沖縄市職員を介して農場での不登校児の受け入れを開始。登校は難しくても農場には来てくれるため、中学校と連携して卒業・就活の手助けを実施。

子ども食堂と連携して高付加価値野菜を栽培

- 2019年、地元ファーマーズと子ども食堂に食材を届ける取組を行ったことをきっかけに、週1回、子ども達に野菜の生産から販売までのプロセスを教える取組を続けている。
- 子ども達とともに腎臓を患った方向けの低カリウム野菜を栽培しており、販売も委託。

車椅子に特化した農場を開設、福祉施設への作業委託も開始

- 2020年、車椅子に特化した農場の開設を目指し、障害者就業・生活支援センターの協力のもと、車椅子の方の職場体験を実施。2021年4月ウィルチャーファームを設立。
- ウィルチャーファーム設立と併行し、2021年8月より就労継続支援事業所からの施設外就労として、週2回8名に野菜の出荷調整作業等を委託。
- 障害者雇用している地元精肉店と連携し、老犬用ドッグフードを開発。
- 売上高は、2012年の営農開始から2020年には約3.6倍に、農地面積は約1.5倍に増加。また、各所との連携の効果で、生産物のPRや販路拡大にも繋がっている。

車椅子の方が健常者に農業を教えることで幅広い交流を目指す

- 農場では、県外の修学旅行生の農業体験や、沖縄市農業青年クラブと連携し、コロナ禍で疲弊した医療従事者への親子収穫体験を実施している。
- 今後も各所への農業体験を継続し、いずれは車椅子の方が健常者に野菜の作り方や障害を持つことによる制限等を教える観光農業に取り組み、様々な立場の方が交流できる農場を目標としている。



子ども食堂との連携



子ども達と栽培する低カリウム野菜



バリアフリー化した農場での職場体験



精肉店とコラボ開発したドッグフード



車椅子でも快適に作業できるよう工夫



農作業（稲作）や木材加工、漁具の修繕など、農福・林福・水福に取り組み、県平均を上回る工賃を実現している。

基本情報

- 所在地：青森県平内町
- 団体名：社会福祉法人
青森県すこやか福祉事業団
就労サポートセンターさつき
- 取組パターン：グループ内連携型
- 主力商品等：米、もち米、木材加工、
漁具補修



（就労サポートセンターさつき）

取組の概要

- 10年以上休耕地となっていた水田の貸借契約を進め、利用者の就労の場の安定化や工賃向上を目指し水稻栽培事業を開始。
- また、シイタケ栽培に使用する原木の伐採作業を行っていたが、安定した作業と工賃確保の為、近隣の薪ストーブ販売店と提携し薪材生産を開始。
- さらに、漁業が地域における生活の要となっているが、高齢化や後継者不足による身体的負担が課題となっていた為、漁具修繕等の軽作業を請負う事で漁師の方の負担軽減と就労機会獲得の両面を実現。



（地域就農経験者を交えた農作業）



（遊休林伐採依頼の請負）



（ほたて漁具の修繕作業）

体制図

青森県すこやか
福祉事業団

就労サポートセンターさつき

就労継続支援B型事業所はっこう
「こだわりの店つぼみ」

（株）城ヶ倉観光

（株）魚国総本社

（株）ぐるめ

薪ストーブwood rack

平内町漁業協同組合

取組の成果

- 地域の水田の90%以上を借入れ、事業所が農業の担い手となっている。
- 農作業に関わる障害者数は、取組当初の4名（平成24年）から16名（令和2年）に増加。
- 平均工賃は取組当初の月14千円（平成24年）から18千円（令和2年）に、平均賃金は月75千円（平成28年）から83千円（令和2年）に上昇。

所在地 ▶ 青森県東津軽郡平内町大字茂浦字向田 2 4

連絡先 ▶ TEL: 0 1 7 - 7 5 5 - 5 1 1 3 FAX: 0 1 7 - 7 5 5 - 5 1 1 7

E-mail: saposen03@syusapo.com

ウェブサイト ▶ www.syusapo.com

【取組のプロセス】

水稻栽培の開始

2011年～

きっかけ

地域の水田が10年以上休耕地となっており、景観保持の観点からも稲作の再開を望む声が多く挙げられていた。

水稻栽培を開始＜2011年4月＞

- 町役場や農業委員会、地権者との相談を重ねながら荒廃農地の貸借契約を進め「障害者総合福祉センターなつどまり_林産班事業」として水稻栽培を開始

旧平内町立茂浦小学校校舎を借入れ「就労サポートセンターさつき」を開設

2012年～

漁具修繕等による漁具加工作業を開始＜2012年4月＞

- 地域の漁業者及び漁業資材加工業者より漁具加工作業の請負を開始

水稻栽培を引継ぐ

就労サポートセンターさつきを開設＜同年8月＞

- 就労サポートセンターさつき(就労移行支援・就労継続支援B型事業)を開設
- 水稻栽培事業を引継ぎ、農業を開始
- 就労継続支援A型事業を開設＜2015年4月＞
- 収穫期には地域住民を招待しながら大収穫祭を実施し、利用者と地域住民の交流を図っている。
- 漁具修繕の請負や地域内海水浴場の清掃を続ける事で、地元の漁師と利用者との関わりが多く持たれるようになっている。



(収穫米を使用した地域との交流(大収穫祭))



(地域の海岸清掃)

薪材生産・販売を開始

2019年～

薪材の生産・販売を開始＜2019年12月＞

- 青森県農福連携マルシェに参加し、利用者と共に生産した米や薪材を一般向けに販売



(農福販売イベントでの薪材の販売)



(売れる喜び→作る喜び)

今後の展望

障がいのある方の「働きたい」を積極支援

- 豊かな自然の下、地域の伝統や産業と協調しながら地域活性化に貢献する事を目標として一丸となって取り組む。
- これからも変化には変化で対応し、小さな発想を大きく議論し合いながら全員が成長し、障がいのある方の「働きたい」を積極的に支援。